「「いま、＜世界文学＞は可能か？：＜全球化＞のなかで21世紀の比較文学の現在を問う」、
『比較文學研究』92号104-121頁、巻末p.7-9, 2008年11月30日

いま〈世界文学〉は可能か？

――「全球化」のなかで二十一世紀の比較文学の現在を問う――

稲賀繁美

一、問題設定

政治・経済・文化を巻き込む「全球化」Globalizationのなかで、比較文学という学問分野もこの影響を免れ得ない。海外の文学作品が日本語に翻訳されて流入を続け、映像化されることによってジャンルを超える（ここは「超域」の意味の「超」を使う。以下は「越境」の意味であれば「越」を用いる）一方、日本語そのものも無国籍的な語彙を増やしている（テニヲハは外来語彙取り込みにはきわめて効率的だ）。とともに日本語の作品も外国語に翻訳され、何人かの作家は国際的な評価を得ている。そこには、あらたな〈世界文学〉への志向も見える。

従来、日本における比較文学研究は、外国作品の日本語への移入や日本文学への影響、あるいは相互並行現象の解明に力を注いできた。だが脱植民地主義の潮流のなかで、西欧中心の規範が問い直され、旧植民地出身作家の評価が国境を越え、著しく向上した。しかしそれとは裏腹に、「全球化」とともに、主要言語が地球を覆う趨勢を見せ、幾多のマイナーな言語が絶滅を危惧される状況も生まれている。多国籍・多言語に通用する「国際的作家」と、一言語の壁を越えられない（あるいは越えようとはしない）地域作家との分別も進行している。

こうしたなか、はたして主要言語（英語など）への翻訳に頼った比較文学研究は〈世界文学〉研究を促進するのか。それとも翻訳（日本語を含む）に頼った研究は邪道なのか、といった議論が北米を発信源として巻き起こっている。また、あくまで原語・原典主義に徹してきた日本の外国文学研究の伝統に比べた場合、比較文学はいかに異なるのか。あるいは独自の差異を主張すべきなのか否か。そして日本の比較文学研究は、海外の比較文学研究の動向から、いま何を摂取し、いかなる特異性を主張することができるのだろうか。そうした問いかけが、比較

文学会の内部からも提起された。(1)

さらに、こうした現状にあって翻訳はいかなる読書体験を約束し、いかなる学術的意義を担うのか。翻訳による文学作品の「渡り」migrationは、比較文学研究において、いかなる役割を演じるのか。翻ってそれは、「全球」global状況下の〈世界文学〉の可能性を巡る昨今の北米での議論、そして古典の新訳やあらたな「世界文学全集」の企画が進行する日本での試みと、どう切り結ぶのか？　こうした問題意識に立って、「比較文学研究の現在」を問い直すことが求められた。以下、この話題について、私見を交えて簡単に問題提起をしたい。(2)

二、〈世界文学〉の問題

まず、昨今の〈世界文学〉World Literature / Weltliteraturをめぐる議論を検討するには、フランコ・モレッティの「世界文学に関する推測」（二〇〇〇年）と題する論文に一瞥をくれておくことが要請されるようである。(3) モレッティについて一言ふれるなら、コロンビア大学の文藝批評の教授である彼には、六八年にはイタリアで学生運動の活動家としての前歴がある。一九九九年であったか、コロンビア大学の比較文学科は、英文学科からの独立を宣言した。ちょうどニューヨークのコロンビア大学構内中央にイタリア領事館が存在しており、イタリア国旗の掲揚されているこの「治外法権」extraterritorialityの土地を利用して、モレッティを中心に、この「政変」が企てられた、という噂を耳にした。いわば植民地宗主国たる英文学からの比較文学の独立だが、これに参与したのは、すでに白血病が進行していたE・W・サイード（当日は欠席）ほかの面々であり、ガヤトリ・スピヴァックが熱弁をふるい、カリブ海出身の作家、仏文畑のルイーズ・コンデも出席したはずだ。東アジア言語文化専攻の教授たちも動員されて、催し物に参加したのに立ち会った経験がある。

こうした背景からもマルクス主義新左翼理論家の出自は濃厚だが、モレッティのきわめて明晰で、切れ味のよい問題構成からは、E・ウォラースティンら、経済学でいう世界システム論を下敷きに、議論を文学の世界に「適用」しようとする姿勢が明確に伝わってくる。まず、〈世界文学〉という、W・ゲーテに淵源をもつ惑星的なシステム構築にあたって、モレッティは社会学者のM・ヴェーバーを引き、それは個々の「文学作品」の次元ではなく、それらを結びつける範疇にまつわる概念の問題であると明言する。そして「ブラジルへの小説の輸入」というロベルト・シュワルツの論文を出発点に、世界文学システムはひとつだが不平等かつ非対称だ、と規定する。標的となる（非西欧圏）文学は、源泉たる（西欧）文学から干渉を受けるが、源泉側は、自分たちがそうした干渉を発生させた元凶であることに無自覚である。こうした干渉は日々発生しているが、それをいかに総合するかが、続く学問的課題だ。

こう宣言するモレッティは、ここで、ナチによって殺害された、レジスタンスの中世史家、マルク・ブロックを担ぎ出す。何年にもわたる分析は、ある日それらを総合するがための準備だ、とブロックは喝破した。その顰みに倣うならば、個別事象

の次元が各国語文学の次元ならば、それを総合する〈世界文学〉の次元とは、もはや直接、原典を読解することはない次元となる。それは、いわば中古品の次元、悪くいえば、上澄み漁りの二番煎じとなる。だがそれでよいのだ、とモレッティは居直る。ヴェーバーの理屈では、「負けるが勝ち」Less is more であり、〈世界文学〉が犠牲として受け入れるべき貧困こそが（イエズス・キリストも教えるように、とは彼は明言しないが）、持たざる貧者ゆえの特権を〈世界文学〉研究者に約束する。原典から敢えて「距離を取った読解」distant reading こそが「知識の条件」condition of knowledge となる、というわけだ。

三、「妥協形成」としての世界小説史の基本法則

こうしたモレッティの宣言が、日本でも一部の論者に熱心に受け入れられた理由の一斑は、彼が柄谷行人（からたにこうじん）やマサオ・ミヨシなどと密接な関係を持っているからだろう。ここで柄谷の『日本近代文学の起源』英訳に序文を寄せたフレデリック・ジェイムソンが引き合いに出される。単純にいえば、小説ジャンルの世界的伝播は、小説という西欧近代起源の形式が世界大に拡散し、そこに各地で地方特産の素材が盛られた過程として記述できる。この発想に即せば、南米であれ、アラブ圏であれ、はては極東も含めて、十九世紀から二十世紀末に至る世界の小説史の第一基本法則は押さえられる、というわけだ。そこで重要なのは、外来の形式と土着の中身との融合には抵抗が伴う、とする観察だ。その結果、出現した小説は、（欧州近代的）規範と（非欧州的）現実との葛藤を仲裁した、「妥協の産物」という様相を呈することとなる。(4) ここで「非西欧の西欧への負債」を見る従来の欧州中心史観は、全面的に否定される。すなわち欧州における「文学の宗教からの自律」や、「各国文学の隆盛の一環としての近代的小説の発展」といった、従来支配的だった図式は、基本法則であるどころか、逆に例外へと転落するからだ。

ここに、第三世界を旗頭に、先進国を巻き込むような革命を目指す思想を見て取るのは容易だろう。そこに二葉亭四迷のみならず、新大陸の北米合州国という新興国のマーク・トウエインや、さらに野谷文昭が提唱するようにウィリアム・フォークナーの場合をも含め、その延長上に一九六〇年代以降の、いわゆるマジカル・リアリズムに代表されるラテン・アメリカ文学を位置づけるならばどうだろう。(5) こうした観点に立てば、日本や南北アメリカを含めた非欧州各地域が、欧州の権威に抗いつつ小説を模索するなかで〈世界文学〉を樹立した、という革命的ヴィジョンも、たしかにたやすく納得できるだろう。事実モレッティにとってこの過程とは、「世界を跨ぐ、象徴的ヘゲモニーをめざす闘争」に他ならない。こうした構想の一端に、柄谷行人という日本国籍の文藝評論家が介在していたことは、国粋主義者にとっては、あるいは苦笑混じりに自慢、あるいは自嘲すべき事柄かもしれない。

近代日本の経験に照らすならば、「西洋小説の結構」に「日本の社会経験という原材料」が取り込まれた、とするのが、『日本近代文学の起源』に関する、ジェイムソンの二元論的弁証法の図式。これに対してモレッティは、対案として、三角形のモデ

ルを提唱する。すなわち「外来のプロット」、「地域特有の登場人物」、それに「地域に根ざした話法」の三要素をとりあげ、とりわけ三番目の要素の不安定性こそが、非西欧小説の特質をなすとの仮説が提出される。ここに三つ巴に発生する「罅割れ」crack あるいは「綻び目」fault line からは、例えばフィリピンのリサール『ノリ・メ・タンヘレ』（一八八七年）のように、カトリックのメロドラマと啓蒙の当て擦りとのあいだの「揺らぎ」として、フィリピンの近代を代表する小説テクストが生成されることともなる。この小説がベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』における「国民＝国家論」の発想源となった経緯にも、もちろんモレッティは過たず触れている。(6)

極東ならば、あらたな言文一致体の訳文を編み出した二葉亭四迷に典型的に見られる、とジェイムソンやモレッティが見なすこうした「揺らぎ」あるいは「ずれ」は、思えばマリア＝ヘスス・デ・プラダ＝ヴィセンテと大嶋仁とが提唱する『ゆらぎとずれの日本文学史』に内在化されて取り込まれたともいえようか。(7) なぜなら普遍を志向する中心と、それへの同化・異化の狭間にたゆたう周辺文化圏の歴史という基本的図式のうえでは、古代以来の日本列島文化史は、そのまま近代〈世界文学史〉における小説の命運を先んじて重ね書きにして体験してきたからだ。デ・プラダ＝ヴィセンテと大嶋は、藤原定家の「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求む」を逆手にとり、川端康成を通して「古き心」と「あたらしき詞」との相克を解明する。こうしてみれば、この二人の著者による日本文学史構想が、意外にも、マルクス主義者文芸批評家フレデリック・ジェイムソンの図式と、驚くほどの親和性を持つものであることも見えるだろう。(8)

と同時に、モレッティに見られる近代中心の「小説」観が、古くから別途の「文学」的伝統を培ってきた文化圏とは、必ずしも反りの合わない構想であることも見えてくる。一例に過ぎないが、井波律子『トリックスター群像――中国古典小説の世界』は、『三国志演義』『西遊記』『水滸伝』『金瓶梅』『紅楼夢』の「中国五大白話小説」を、トリックスターの活躍と盛衰・消長という観点から通覧し、それらが全体としてひとつの宇宙をなして展開し、民間芸能から精緻な小説へと変貌を遂げた様を活写した。(9) 西欧との接触が本格化する以前のこうした内的発展は、モレッティの図式からは自動的にこぼれ落ちてしまう。いい換えれば、西欧と非西欧とが接触し、相互に浸透と触変作用とを経験して以降の「近代」が、モレッティの定義する〈世界文学〉成立の要件ともなる。ついでにいえば、所謂「白話小説」は、中国伝統の「四書五経」の「文学」定義からすれば、そもそも「文学」でさえなかった。それらが「小説」という枠組みに括られたのは、魯迅らが近代白話運動のなかで、西欧渡りの「文学史」概念を中国に逆照射して、時代を遡って当てはめて中国の過去の文化現象に適用して以来のことに過ぎない。近代の西欧世界とその外部との接触で、「文学」≒"literature"の定義と認知そのものに、すでに象徴的次元のヘゲモニー争いの葛藤があり、さまざまな妥協が介入した。(10) そのことは、北米で活躍する中国近代文学者には常識だろうが、〈世界文学〉を論じるうえでも、改めて想起されねばなるまい。(11)

四、適正なる分業？――一国文学者と比較文学者

このあたりから、モレッティの〈世界文学〉構想の欠陥が表面化してくるが、最も問題含みなのは、樹状模型と波動模型の対比だろう。樹状模型とはいうまでもなく系統発生論的な比喩。植物学に起源を持ち言語学に応用されたものだが、比較修辞学の分野をはじめとして、文学の形態的発展や影響・被影響の派生関係を辿る道具としても、その有効性は無視できない。これに対して波動モデルは歴史言語学に起源を持つが、例えば農耕の起源と伝播といった理論にも、同様の比喩が用いられてきた。ここでモレッティはきわめて強引・大胆にも、樹状模型の派生関係を辿るのが国民＝国家レヴェルでの文学の営みに合致するのに対し、波動モデルは市場構造の解明に適している、と断定する。むろん世界文化はこの二つの機構のあいだで「揺らいで」おり、その両者の妥協形成の断面図を切り取り、そこに現れる生態を把握することが、比較文学研究者の務めと定義される。それにしても、なぜ国民文学が樹状模型であり、〈世界文学〉は波状模型に適合するのだろうか。さらに、波状模型は伝播を前提とするが、これは同時多発を認める原型論への、モレッティのイデオロギー的な拒絶を暗に意味しているのだろうか。

それらをきちんと説明する代わりに、モレッティは突如「比較文学者」としての信条告白に向かう。*Atlas of the European Novel*（一九九八年）の編者でもある彼の脳裏に浮かぶのは、学会の勢力地図と陣取り合戦の縄張り争いのようだ。[12] 原典に直接接近する言語能力を誇る「一国文学研究者」に対して、その強みを定義として剝奪された――あるいは自ら放棄した――「比較文学者」が、自らの優位を確保するには、系譜学的博識に張り合うだけの理論的立脚点が不可欠となる。それが "Less is more" の貧者の選択としてのメタ・レヴェル志向、理論的高みへの飛翔だったことになる。「一国文学研究科」群に対抗し、「比較文学研究科」の存続を正当化するためには、何が必要か。各国文学が、限定され区画された領土の保全を図る「血と大地」の系統樹に執着するならば、比較文学には、各国文学の国境を乗り越え、自由に越境し波及するような〈世界文学〉、すなわち波状模型が描く移民遊牧型の〈世界文学〉を志向するよりほかに、生き残り策はない。これは著しく北米移民社会の学界事情に内属した学会政治的発言だが、そこには英文学科に「独立宣言」を突きつけた「革命家」の、背に腹は替えられぬ実存の「揺らぎ」も透視される。

ここでモレッティは、自分たち、北米比較文学会の内情を巧みに隠蔽しているが、そこに錯綜する樹状構造と波動運動との衝突や「揺らぎ」への洞察が、モレッティの分析からは、（当然ながら）見事なまでに脱落している。[13] そこには、①一九八〇年代以降の理論研究猖獗の代価、②北米学界英語出版覇権主義の弊害、③学界固有領土確保への執念、さらには、④学術研究を資本主義市場原理に還元してしまったつけへの悔恨などが、複雑に絡まって地下茎をなしている。実際、この四半世紀ほどの文学理論偏重の研究動向は、多くの比較文学者たちを英語単一言語主義の学術成果生産へと閉じこめてきた（とはいえ、

英語と米語も、いまや編集水準では、互いに相容れぬ別言語として相互翻訳を必要とするが)。若い世代には、英訳の文藝理論と、英訳された文学作品以外には、外国語による文藝作品原典にまったく興味を示さない、外国語能力不足の研究者が大多数を占める。彼および彼女らは、もっぱら出来合いの文藝理論にそって、英訳された作品を裁断することだけを「研究」と心得ている。各国文学者と語学力では競争にもならない、彼および彼女らの利益を保護し、その系統発生による再生産と学問市場の分け前を確保するには、英語さえ使えればよく、それで市民権が得られるという〈世界文学〉研究の確立が急務となっていたはずである。

またモレッティは、一国文学の宇宙と比較文学の宇宙とは、けっして「並行宇宙」parallel universe ではない、と強弁する。だがこれも、人文学低迷のご時世にあって、少ない「パイ」pie の取り合いによって自分の陣営が自滅することを防ごうとする防衛策だろう。この点でモレッティの主張には、領土保全・拡張への意思が濃厚であり、同じコロンビア大学に勤務する僚友、デイヴィッド・ダムロッシュの見解とは、大きく隔たっているように見受けられる。ダムロッシュにとって世界文学とは、地域と普遍という双数の焦点からの引力の均衡点に楕円軌道の軌跡を描きつづける、無限運動体を意味する。さらに彼は、ヒュー・ロフティングの『ドリトル先生』物に登場する双頭の動物"Pushmi-pullyu"(邦訳では「オシツ・オサレツ」)を持ち出し、それと同様の象形文字が古代エジプトにもあることに言及しつつ、世界文学というものを、二つの相反する意思がひとつの個体に辛うじて組み合わされながらも不断に分裂しようともがいている、矛盾の具現として描いてみせる。[14]

いささかの単純化が許されるなら、モレッティが各国文学と比較文学とに役割を分業(division of labor)させて解消しようとする困難を、ダムロッシュはむしろ無理は承知で一身に引き受けようとする。古代アッシリアはギルガメシュの楔形文字の叙事詩から、リゴベルタ・メンチュによる現今の脱植民地文学にまで跨る広大な地平を走破し、比較文学という方法に内在する居心地の悪さ、安住の地を自らに禁ずる覚悟にこそ、ダムロッシュは比較文学の倒錯的意義を見定めようとする。[15]

五、地域文学と世界文学との分岐点

ロフティングの『ドリトル先生』物を日本語に翻訳したのは、井伏鱒二(一八九八―一九九三年)だったが、その『黒い雨』(一九六五年)は、刊行翌年にはジョン・ベスターによって*Black Rain*として英訳され、いち早く〈世界文学〉の仲間入りをした。これといわば好対照な軌跡を描いたのが、ドナルド・キーンも早くから注目した作家、石川淳(一八九九―一九八七年)の同時期の長編『荒魂』(一九六四年)だったかもしれない。井伏が英語文学の日本語訳者だったのに対して、石川淳は同時代を共有したジッドやアナトール・フランス、C・F・ラミュからフランス古典喜劇のモリエールに至るフランス語圏作家の訳者として、夙に知られていた。だが、輸入業に功績のあった作家の作品が輸出に適しているかどうかは、自明ではない。どれだけ

の遅延とともに外国語に訳出され、どの段階で外国の読者に読まれるかによって、作品の受容も、当然ながら大きな違いを見せるだろう。この点では、アーサー・ウェイリーによる英訳『源氏物語』（一九二五年より刊行開始、一九三三年完結）は、正確にプルーストの『失われた時を求めて』（一九二四年より刊行開始、一九二七年完結）のチャールズ・スコット＝モンクリフによる英訳と同時代の、二十世紀英語文学中の傑作であり、それを育み、そして受け入れたブルームズベリー・グループはまた、D・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』を生みだしながらも醜聞を招いた、同時代の文化環境であった。平川祐弘氏によるこの洞察は、ゆくりなくも、英語翻訳による〈世界文学〉の一面を犀利に摘出した指摘といえよう。[16]

最近『日本近代モダニズム選』[17]を上梓したウィリアム・タイラー氏が、目下『荒魂』の翻訳に取り組んでいるが、『荒魂』は現時点で、井伏の『黒い雨』英訳に対して、すでに半世紀程度の遅れをとっている。だが、この五十年の遅延は、『黒い雨』の時事性の影に隠れていた石川淳の作品が内に孕んでいた〈世界性〉が、後発の「理論」によって、ようやく納得されるのに必要とされた、敗戦後半世紀の時の成熟を物語るものではあるまいか。[18]

そのタイラー氏による『荒魂』訳文を、奔放自在なる日本語原文と比べると、「魂」とか「気魄」などといった、石川淳には頻出するものの、日本語ではごく普通の語彙が、いざキリスト教圏の言語へ翻訳するとなると、いかに訳し辛い概念であるかも判明する。「気合」など、タイラー訳に見える「速さ」speed や「情熱」passionとは無縁の魂振り、魂魄の籠った語彙のはず。松田優作は、遺作となったリドリー・スコット監督作品の *Black Rain*（一九八九年）――題名は、偶然ながら、井伏の作品と同一――中の、ヤクザが指を詰める場面で、この「気合い」の張り詰めた強度（intensity）を見事に演じてみせた。だが欧米語にこれと等価な単語は存在せず、主演のマイケル・ダグラスにも、この魂魄の気合いを演じることばかりは、どうにも不可能だった。[19]

こうしてみれば、原作と翻訳とが、幸いに両者併存しえた場合にも、それらがモレッティの主張とは違って、ひとつに集約することなく二重焦点の「並行宇宙」parallel universeを描くことは明らかだろう。そしてこの原典と翻訳との関係を考えるときに思い出される観察がある。カール・レーヴィットはナチによる迫害を逃れて亡命した日本で教鞭を執った哲学者だが、彼は日本での教授経験について、こんな感想を残している。授業のあいだ、日本の学生たちはプラトンからハイデガーに到る一切の「哲学」（すなわち西洋哲学だが、レーヴィットにとっては、西洋哲学以外の「哲学」は考えられなかったようだ）をまじめに勉強し、貪欲に吸収している。だが授業が引けると、かれらはいわば哲学という二階から、日本という一階へと降りて、二階とは無関係な純然たる日本的生活に戻ってしまう。そして問題なのは、一階と二階とを繋ぐ梯子が、少なくともレーヴィットにとっては、どこにも見当たらないことにあったようだ。[20]

六、二階建て模型の功罪

このレーヴィットの観察を批判して、下村寅太郎は、ここにあるのは西洋人知識人による日本文化批判の常套に過ぎない、と切って捨てている。だが、ここに指摘されている一階と二階との断絶が、先にモレッティによって指摘されていた「裂け目」crackあるいは「綻び目」fault lineにそのまま重なることは、すでに明らかだろう。おそらく酒井直樹はこうした事態に「地図作成術的想像力」cartographic imaginationの名前を授け、国民＝国家の覇権争いと、文学共和国における言語闘争とを、ミッシェル・フーコーの比喩に頼り、「瓦状の折り重なり」embricationとして相互にずらせ、重ね合わせて理解しようとしているように見受けられる。そこには日本語の世界と英語の世界との相克に長年苛まれ、その臨界の前線に立って仕事をしてきた酒井なりの実感があるのだろう。それはたしかに、酒井の学者としての履歴の軌跡（「迹」traces）をなしている。[21]

だが、私見では、地理学的な比喩よりは、むしろ地学的な地殻変動と、それに伴う断層や褶曲の比喩のほうが、事態を理解するにはより適しているように思われる。それを市場構造に託して図式化すれば、モレッティの国民文学と世界文学との区別は、以下のように構造化できるだろう。すなわち複数の地域的・言語的な文学生産の場が割拠している現場、という平面のうえに、〈世界文学〉と称する、普遍性を標榜する「全球市場」global marketが覆い被さるように載っている。地域市場から〈世界市場〉へと「上場」するのは、株式市場にも似た機構だろう。だが、いうまでもなく、地域市場から〈世界市場〉への上昇過程は単純ではなく、そこには幾多の試練が待ち受けている。地域市場の商品が〈世界市場〉へと参入するためには、両者の間に介在する、断層や褶曲にも類比できる錯綜した構造を通過しなければならない。無傷で無事に通過するものもあれば、満身創痍で変成作用を受ける品もあり、そもそも「上場」になど無関心というむきもあろう。そして大多数の地域産品は、通過不可能で淘汰されてしまうだろう。[22]

通俗マルクス主義経済学では、経済的要因という下部構造が、文化現象という上部構造を規定する。だがこの〈世界文学〉市場では、依存関係は転倒しているはずだ。すなわち〈世界文学〉というグローバルな市場は、地域市場の下支えなどではなく、逆に地域市場からの搾取のうえに浮かぶ空中楼閣に過ぎない。だが、人々はともすれば、〈世界市場〉に上場したメイジャーな作家たちが〈世界文学〉を主導しており、各国文学というマイナーな地域市場は、その支配下にあると意識している。世界的認知と栄達への夢は、劣等意識と裏腹だ。これはモレッティが〈世界文学〉と各国文学とを上位／下位に分別しようとした「分別」distinction意識に重なる。[23]

見やすい比喩を使うならば、いわば〈世界文学〉はタイタニック号最上甲板の一等船客たちの社交界といってもよい。その下には移民の三等船客があり（これはさしずめ越境する無国籍のディアスポラ文学の担い手ということになろうか）、[24]さらに水面下の汽罐室には、ボイラーに石炭をくべる肉体労働に従

事する火夫たちが居る。かれらこそは、きわめつきのプロレタリアートであり、伝統的な理論に従うならば、革命はこの社会の底辺から勃発することになっている。ジェイムソンは、あきらかにこうした階級社会を念頭に置いて、近代小説の世界地図あるいは〈世界文学〉を論じていた。そのことは、西欧近代の「文学形式」という成型に必要とされる「原材料」を供給するのが非西欧世界の役割である、とするがごとき上下関係の受容供給・対比図式に、彼がなんら疑問を差し挟まないところにも露呈している。そして一次産品の原材料は、西欧社会に輸出され、そこで製品へと加工され、摩天楼にも比されるモダニズムの金字塔を打ち立てる。とともに、空疎な享楽の影で、その代価として発生した氷山との衝突により船底に走った亀裂という社会矛盾が、やがて上層社会を転覆させることにもなる。(25)

そしてここまでくれば、翻訳こそが、地域市場と〈世界市場〉との両者の裂け目に架橋し、地域から〈世界〉への上昇を助ける梯子を掛けようとする、いわば無謀このうえない試みであり、原材料を成型して製品へと加工する、否応なき妥協形成の現場であることも、もはや疑いないだろう。ノーベル文学賞ひとつとっても明らかだが、そもそも主要言語に翻訳がなされないことには、評価対象作品として認知されるための登録すらままならない。こうして、〈世界文学〉の構想において、翻訳という作業が担うのっぴきならない役割に、あらためて検討を加えることが要請されるに到る。(26)

要点を二つ指摘しておくならば、まず第一に、事態は〈世界文学〉に例えば日本文学の傑作を仲間入りさせればよい、という水準の問題ではない。地域から〈世界〉へと透過すればよい、という話ではないのだ。従って第二に、翻訳の役割は、けっして地域文学、各国文学作品を〈世界文学〉の領分へと通過させるための、言語的篩（フィルター）ではない。むしろ、そこでいかなる異質性ならば許容され、いかなる限界を超えた異質性は堰き止められるのか、が見極められる。この見極めからは、逆に〈世界文学〉が暗黙のうちに規定する許容限界と、その内部に構成される隠された同質性とが画定されることだろう。許容限度を超えた異質性がいかにして、文字通り「破門」ex-communiate されるか、すなわちいかにして〈世界文学〉次元の意思伝達情報網の外部へと跳ね返され、放逐されるかを見定める機会を提供してくれるだろう。(27)

七、翻訳という名の梯子

妥協形成の場にして文化間の架橋行為としての翻訳。とはいえ、たとえ水平の橋を架けるにしても、橋が架かったからといって、両岸の懸隔が一挙に解消されるわけではない。(28) ましてや、下の地域市場から上の〈世界市場〉に懸けねばならぬのは、垂直な梯子である。橋であれ、梯子であれ、それらの存在は、両岸に歴然たる断絶があることを、かえって露わにもする。橋の長さは懸隔の大きさに比例する。その断層線（fault line）に注目せよとするモレッティの主張には同意してよい。だが、そのためにはテクストに密着した解読など不要だ、と決めつけるモレッティの見解への同意は、きっぱりと拒絶したい。比較

文学者は論争を要する（comparatists need controversy）。このモレッティの格言に従い、ここで、彼の立論の問題点に踏み込みたい。

たしかにモレッティはまっとうにも、こう指摘する。〈世界文学〉といいながら、実際に教室や学術論文で読解の対象とされるテクストは、きわめて少数の規範的な作品に集約・限定されてしまう。所詮、無限に等しい数量を誇る文学作品全体を読むことなど、もとより不可能な相談なのだから。それならいっそのこと反対に、今や「テクストを読まない術」をこそ習うべきだ。そんな「悪魔との契約」を彼は提唱する。だが、ここには幾つかの混乱と、意図的飛躍即ち短絡があろう。それを、翻訳事業、翻訳内容、翻訳語彙の選択、に分けて考察してみよう。

まず第一に、少数言語の文学作品を主要言語へと翻訳することで、〈世界文学〉への仲間入りが果たせる、とする過信あるいは誤解がある。これは一歩間違うと、英訳が成就されさえすれば、それで〈世界文学〉の一員に認められたと勘違いする幻想へと結びつく。例えば、日本が〈世界〉に誇る古典を、翻訳によって〈世界〉に向けて発信しようとする使命感の如きは、それだけならむしろ「健全」な国民意識だろう。だが国際的認知への渇望や国際的名声への欲求の背後からは、時に自己中心的な国粋主義、偏狭な国家的矜恃、さらには国語的自尊心が顔を覗かせる。岡倉覚三、新渡戸稲造、内村鑑三らの「英語名人世代」にこうした徴候を読み取るのは容易であろう。(29) 源義経をチンギス・ハーンと同一視する荒唐無稽な国粋的妄想の普及に関与した、末松謙澄から小矢部全一郎に到る知識人が、いずれも優秀なる留学組だったことも看過できまい。(30) 戦前期アジアを代表する国際詩人だった野口米次郎が、戦争期に至って極端な国家主義的言動の宣伝係となったことも、けっして個人的な資質の問題にはとどまるまい。(31)

次に〈世界〉への仲間入りを目指すと、かならずふたつの傾向へと分岐する。一方では国粋の意識を世界に喧伝しようとする純粋志向。他方では自己を滅却して国際的基準に順応しようとする志向。前者は日本文学の作家でいうなら、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫という、いわゆる「御三家」が担った（あるいは担わされた）役割であり、後者には、安部公房、大江健三郎から村上春樹に到る系譜を想定することも許されようか。〈世界〉において「日本」を「代表」するのに、どちらがより相応しいか、といった議論は不毛だろう。日本志向も国際志向も、そのいずれもが、〈世界文学〉という問題設定に対して模範解答を探す過程で発現する典型的な病理であり、一国文学や特定言語文学がすでに時代遅れを宣告される現今においてもなお、〈世界〉の需要に応えるには、時宜に応じて、この両者を使い分ける以外の選択はむつかしい。

第三に、これが翻訳語彙の問題に結びつく。「日本」美学の精髄といえば、「侘び」「寂び」「幽玄」とくるのが定型だが、これらの用語が国際的に通用したのは一九三〇年代以降のこと。いずれもアーサー・ウェイリーと鈴木大拙の周辺の訳業が貢献して国際的な認知に到った様が、*Oxford English Dictionary* の用例からも窺える。(32)「をかし」や「あはれ」は、なぜか英語の語彙としては認知されずに今日を迎えているが、ここにも翻訳に

おける選択的透過性の問題が露呈しているはずである。蛇足の冗談ながら、「あはれ」は“aware”と転写されてしまえば、電子検索では普通の英語の動詞と区別がつかず、技術的にも認知不可能となってしまう。「あはれ」は国際認知のうえで、英語至上主義下では、とりわけ不利な条件を抱えていたわけだ。なお「侘び」から「寂び」への系譜に「象徴主義」を見出し、この定義に沿って、英語力を駆使しつつ、松尾芭蕉の国際的認知に尽力したのが他ならぬ野口米次郎だったことも、ここで想起しておくに値するだろう。

翻訳における架橋が成立するためには、発信の側と受信の側との双方の条件が折り合う必要がある。劣位に置かれた発信側が抱える危険は、すでに指摘したとおりだが、優位にある受信側では、受信側の都合による選択的受信が横行し、ときに〈世界〉の名による受信拒絶が演じられる。劣位の側の異質性は、優位の環境が容認できる臨界内に収まっていることを要請される。現今ではこれは「国際社会」international community という隠語のオブラートにくるまれている。見やすい例では、UNESCOの世界遺産認定（とりわけ無形文化財）などでも、政治的配慮（political correctness）、男女差別の忌避、保護なくては消滅の危機に瀕しているとの判断ほか、いくつもの基準に合致した対象しか認定されない現実が知られている。また認定を受けるために、現地の無形文化遺産が不可逆的な変質を蒙った幾つかの事例も、専門家には周知である。(33)

比喩的にいえば、こうした変質も、文化翻訳の過程にあって、〈世界〉あるいは「国際社会」を標榜する受容者側の嗜好、あるいは受け入れ基準に合わせて、発信情報（源）が加工され、変質を蒙った事例といえるだろう。これはあまりに有名な例だろうが、宮崎駿（はやお）監督の映画版『風の谷のナウシカ』（一九八四年）は、北米での最初の劇場公開では、女主人公の幼少回顧の場面などが軒並み削除のうえ二十分ほど短縮され、*Warriors of the Wind*（一九八五年）として単純な戦争アクション・アニメに衣替えさせられたという。これは日本版アニメ作品の著作権・上映権にも関わる事例であり、晩年の手塚治虫が、フランスで開催された会議の席で、自作のコピーライトが欧米で無視されている現実に怒りを隠さなかった様子を、筆者はよく記憶している。(34)

概して、自然な印象を与えようとして工夫した部分に限って、受け手の環境に過度に順応した恣意的な翻訳が発生しやすい。最近物故したエドワード・サイデンステッカーは、ウェイリー訳『源氏物語』の登場人物があまりにブリティッシュ臭いと批判した自分も、結局は「自然」な印象を米国の読者に与えようとして同じ轍を踏んでいる、との感想を抱いていたようだ。(35) 谷崎の『細雪』や川端の『雪国』の場合にも、原作の話法はときに「一貫性」を欠き、西欧の小説の基準に従って、訳者が時制を整えざるを得ない場合が出来する。だがそのお蔭で、原典がその断続性のなかに隠し持っていた秘密が、訳文からは蒸発してしまう、といった「事件」も発生する。『雪国』での島村の情事は、時間の経過を空白で示すことで、沈黙のうちに巧みに暗示されていた。だが、それが英訳では、英語文体が規範として要求する話法の均質的一貫性（narrative coherence）ゆえに、

読者には不可視同然に消え失せてしまう。谷崎の場合については、ツルタ・キンヤも指摘しているが、翻訳過程での思わぬ改変や細部消滅の顚末は、原文と翻訳とを詳細に読み比べてみて、初めて判明する。(36)

八、翻訳という「悪魔との契約」

こうしてみると、原文テクストを「読まない術」という方法論を推奨するモレッティの主張の内部破綻は、もはや歴然としているだろう。なぜなら「距離を取った読み」は、彼が追究しようとしていたはずの「揺らぎ」や「断層線」への理解を、かえって妨げることとなるからだ。その限りで、彼の指南は、逆効果を及ぼすばかりの、いかにも倒錯した提言であり、文字通り「悪魔との契約」だった、といっては皮肉だろうか。だが私見によれば、本当の「悪魔との契約」は、むしろ他ならぬ翻訳行為そのもののなかに、密かに象眼されていたのではないだろうか。(37)

美術の世界でひとつの例を挙げるなら、ここで考察に値するのが、徐冰の場合だろう。彼は偽物の漢字を体系的に捏造し、その文字を施したインスタレーションによって、非漢字圏の海外市場むけの売り込みに大成功を収めた。これは一方から見れば、〈世界市場〉への見事な参入である。だが徐冰は周到にも、地域市場である漢字文化圏の観衆に対しては、自分の発明した漢字が紛い物に他ならないことを誇示し続けている。徐冰発案の漢字が荒唐無稽であることは、〈世界市場〉の関係者には知識としては知られても、記号としては無意味に等しい。だが、このこれ見よがしだが不可視のメッセージは、彼の出身地の「地域市場」の漢字使用者には歴然としている。とすればどうだろう。一見、世界に通用する片道切符を入手したように振る舞いながら、この中国当代の芸術家は、〈世界市場〉への安易な回収を、象徴的次元で断固として拒む、強(したた)かな二枚舌、二重帳簿の抵抗運動を暗黙のうちに実践していたことになる。(38)

翻って文学の翻訳を考えてみても、そこでは同様の面従腹背ともいえる現象が、恒常的に起きているはずだ。英語圏への翻訳に代表されるような、主要言語が支配する巨大市場への参入によって、弱小言語圏の文学作品は、たしかに〈世界文学〉への候補者としての切符を手に入れる。だが原典と英訳とを読み比べるだけの能力に恵まれた読者には、両者の落差を楽しむ密かな愉悦が約束される。原典と翻訳との電位差や、翻訳の過程で作品が蒙った化学反応、あるいは錬金術にも見紛う変身ぶり。そこには文学作品が翻訳という「渡り」migration を通して経験する、あらたな生命の軌跡が探られる。固定したものとして〈世界文学〉を想定する必要はあるまい。むしろ翻訳による「渡り」を通して弛まぬ変貌を遂げ、新たな読者を獲得しつつ再生する不死鳥のような飛翔の姿。(39) そこに〈世界文学〉の動態を捉えるほうが「健全」ではあるまいか。何が翻訳を生き残り、何が翻訳の途上で犠牲となる他ないか、そして翻訳を通じていかなる「実体変化」transsubstantiation を閲するか。それは実際に翻訳を通過してみないかぎり、露わになることはない。そして翻訳によって失われるものから、改めて原典の価値も再認識

される。その落差、いわば翻訳と原典とを隔てる「川幅」の障害の大きさこそが〈世界文学〉の指標となる。

いい換えれば、原典作品のなかに潜在的に眠っていた可能性の幾ばくかは、翻訳という起爆装置を介して初めて始動し始める。そしてその作品の覚醒と脱皮の姿、場合によっては破壊の惨状をも、現場において捉え、それを剝製として固定するのではなく、むしろ反対に暖かく、あるいは冷徹に見守って飼育する、特権的な観察実験室の意義は、みじんも揺らぐまい。いわば異質な文化圏・言語圏という気団同士が衝突する前線に身を晒し、その前線の暴風雨のなかで翻弄されながらも、巧みに風の目を読み、その不連続線、気団同士の「裂け目」crackや「綻び目」fault lineに、ふわりと翼を浮かべる工夫が、翻訳という渡り鳥の営み(migration)だろう。

そしてこうした翻訳の現場に踵を接する観測拠点(observatory)としての比較文学は、暴風雨に晒される前線の観測点に留まる任務を全うし続ける限りにおいて、二十一世紀にも、よりおおきな役割を担ってゆくのではあるまいか。そこに「全球化」globalizationにおける〈世界文学〉の可能性も、刻一刻と変貌することをやめぬ動詞的、ないし気象学的な様相において、定位することができるだろう。そこにあっては、「日本」(そして「各国」)の比較文学者の使命とは、もはや「日本(語)文学」をはじめとした「各国(語)文学」の「古典的傑作」を〈世界文学〉に仲間入りさせる先兵、などといった自己規定を、遙かに超えたものとなるだろう。ここに、国際比較文学会ＩＣＬＡの積年の限界と、旧態依然たる現状とを乗り越えるための、ひとつの方向が見えてくる。

九、痕跡抹消による輪廻転生

『源氏物語』千年に因んだ話題で、とりあえずの締め括りとしたい。「柏木」の巻のあまりに有名な逸話だが、女三宮は柏木とのあいだに子をもうける。不義の息子、薫の誕生である。姦通の呵責に悩む柏木は死を迎える(ここには寝取られた源氏の密かな「怨念」という、原典の示唆する解釈と、柏木の「罪障感」という西洋的な解釈との落差が点滅し、文化横断・精神分析的な読みを誘発するだろう)。薫五十日の祝いの日に、実の父はすでに居ない。薫を抱く源氏は「静かに思ひて嗟(なげ)くに堪へたり」とうち誦じ、赤子の薫に対して「汝が爺に」と諫めようとする気配であった、と紫式部は書く。ここには白楽天の詩「自ら嘲る」が下敷きになっている。「実の父親には似ることなかれ」。それが、省略のうちに秘められた祈りだった。

ところが、白楽天の原詩と比べると、さらに恐るべき事実が判明する。紫式部は、ことさら意図的に、肝腎な一行を省略しているからだ。それは「一珠はなはだ小にして　還りて蚌(はまぐり)に慙ぢ」という語句。中西進氏はこの段への犀利な評釈で「子は一粒の真珠のごとく美しく小さい。しかしそうなれば一層、はまぐりを恥ずかしく思うというのである」と述べ、「美しい真珠を生む貝の肉、その醜くグロテスクな肉塊」という露骨な官能の詩句へと読者の注意を導く。(40)

当時の学のある読者には、紫式部が白楽天を下敷きにしたこ

とは容易に察せられたことであろう。そしてそれだけに、彼女が何を敢えて引用から落としてやり過ごしたかも分かっただろう。抹消の痕跡が残る羊革紙（palympseste）。中西氏はそこに、紫式部の「隠し刃」、読者をたじろがせずにはいない沈黙の技巧を見る。英訳の『源氏物語』にのみ接する読者に、意図的に脱落させられた原典を想起するだけの才覚は、もとより期待しがたい（ロイヤル・タイラー訳でも、白楽天の原詩への注記はあるが、今述べたような詳細にわたる記述はない）。(4) だが紫式部はここで、翻訳を通して原典を隠しながら、逆説的にもそれによって原典の詩を引き立て、と同時に隠蔽によって自らの創作に一層の含蓄を与える術を、それとなく漏らしている。

古典中国文学から日本文学への、秘められたる変貌の睦言。〈世界文学〉への架橋の秘訣は、紫式部が白居易を自家薬籠中に取り込んだ、こうした不可視の技巧のうちにこそ、密かに、広くそれと知られることもないまま、その真髄を発揮しているのではなかろうか。翻訳を通じた意味の渡りと増幅とには、その反面としての磨耗や減衰も不可避だろう。だがその得失の振幅の擬態のなかに、永遠の運動体として経験されるのが〈世界文学〉の生態にほかなるまい。今〈世界文学〉に要請されているのは、原典を無視した“distant reading”ではなく、原典と翻訳との距離を読む“distance reading”であるはずだ。

［注］

＊本稿は、日本比較文学会創立六十周年記念第七十回全国大会・記念シンポジウム（二〇〇八年六月二十二日、十三時半―十七時。大妻女子大学・多摩キャンパス）において、筆者が司会を務めたさい、開始時刻遅延のため、会場では発表を取りやめた進行メモを敷衍した、あくまで仮初の覚え書きである。シンポジウムの実現にあたっては、井上健・学会会長ほか、理事のソーントン不破直子、齊藤恵子をはじめとする先生方のご配慮・ご尽力を賜った。記して謝意を表す。

(1) 「日本比較文学会創立六十周年記念第七十回大会プログラム」『日本比較文学会会報』第百八十号、二〇〇八年五月、三〇頁の「シンポジウム」要旨を参照。なお本主旨説明文は、立案に関わった一理事（匿名ご希望）のご執筆である。

(2) 以上は本シンポジウムのために準備した趣旨説明。シンポジウムでは、以上のような問題意識を出発点として、理事会から指名のあった各分野の第一人者を中心とする学会員および招聘を許可された特別ゲストを加えて発表を依頼し、二名のコメンテイターからの反応を加味し、活発な議論を展開することを目指した。

講師としてご発表戴いた柏木隆雄、野谷文昭、ウィリアム・タイラー、ディスカッサントの役割をご快諾戴いた劉建輝、マリア＝ヘスス・デ・プラダ＝ヴィセンテの諸先生に御礼申し上げる。本稿は、当日の会場でのこれらの論者の多岐にわたる発言への筆者の即興のコメントを適宜織り込んで再構成したものであることをお断りする。

(3) Franco Moretti, "Conjectures on World Literature," *New Left Review*, No. 1, Jan.–Feb. 2000, pp. 54–68.

(4) 同様の視点から日本近世文学と中国文学・近代文学とフランス文学との交渉の軌跡をたどった充実した鳥瞰として、柏木隆雄『交差するまなざし』朝日出版社、二〇〇八年、とりわけ終章「まなざしの行方」（三二九―四六頁）を参照されたい。この論文では、近世文学が、換骨奪胎された原典を教養として共有する講読者を対象としたのに対して、近代文学以降、それが自明ではなくなったという仮説が提起されている。

(5) 非西欧の作家が、自分の土地を出撃基地として、西欧モデルの小説を鋳直す結構に関する野谷の見解は、『日本経済新聞』二〇〇八年三月二十九日付文化欄で、千場達矢記者によって「地方の姿、鍛仕立て／現代文学にラテンアメリカの流れ／虚実交ぜ異空間に」として敷衍されている。

(6) その後、こうした構想に基づき、Franco Moretti (ed.), *The Novel*, 2 vols, Princeton: Princeton University Press, 2006 という千八百頁に及ぶ浩瀚な研究書が公刊された。その序文でモレッティは小説（Novel）を「最初の真に惑星的な形式」であり「恒に新たな方向へと飛翔する準備のできた、

不死鳥」に譬えている。

(7) マリア＝ヘスス・デ・ブラダ＝ヴィセンテ／大嶋仁『ゆらぎとずれの日本文学史』ミネルヴァ書房、二〇〇五年。ここには世界史的な視野から日本文学史を問い直す壮大な見取り図がある。

(8) 日本列島がイベリア圏の「普遍」にいかに棹さしたかの要点を簡略に述べた試みとして、Shigemi Inaga, "Japanese Encounter with Latin America and Iberian Catholicism (1549–1973), Some Proposals for Possible Directions of Research in Comparative Literature," *Beyond the Border, Trends in Comparative Literature outside US, International Forum*, American Comparative Literature Association, Puebla Meeting, April 21, 2007. *The Comparatist*, Vol. 32, May 2008, pp. 27–35.

(9) 井波律子『トリックスター群像――中国古典小説の世界』筑摩書房、二〇〇七年。

(10) 鈴木貞美『日本の「文学」概念』作品社、一九九八年、六五―八〇頁。またその英訳、Suzuki Sadami, *The Concept of Literature in Japan*, translated by Royall Tyler, Kyoto: IRCJS, 2006. なお、"文学"と"literature"との関係に類比できる問題が「美術」と"Fine Arts"の間にも存在する。その検討と、学問史的な問題の簡単な総括としては、Shigemi Inaga, "Is Art History Globalizable? A Critical Commentary from a Far-Eastern Point of View," in James Elkins (ed.), *Is Art History Global?* New York and London: Routledge, 2007, pp. 249–79.

(11) この点に関する、体系的で鋭い問題提起として、劉建輝「近代東アジア文学史の再構築」国際日本文化研究センター、共同研究会「東洋美学・東洋的思惟」を問う」二〇〇八年四月二十六日口頭発表。

(12) 同様の「アトラス」志向は、John Onians (ed.), *Atlas of World Art*, London: Laurence King Publishing, 2004（河野美也子訳『世界美術史アトラス』東洋書林、二〇〇八年）という大冊豪華本にも窺われる。たしかに世界全体を視野に収めた意欲的な企画であり、東欧圏などの情報は重宝だが、こと東アジアに関しては、西洋史の時代区分でこれを整理することなどとても不可能な限界が、かえって露呈している。

(13) アメリカ比較文学会と国際比較文学会とは、北米合州国では別組織だったが、二〇〇七年以降、ようやく両者の「相互会員登録」double membership を承認する方向へと移行しつつある。筆者は二〇〇七年のメキシコ・プエブラにおけるアメリカ比較文学会に設けられた国際比較文学会のシンポジウムに招かれたが、メキシコでアメリカ比較文学会を開催する方針そのものが、英語至上主義に対抗するスペイン語圏出身理事の権利主張であるとともに、メキシコにあってはスペイン語使用そのものが、支配者の言語の貫徹にほかならないことを改めて納得した。アメリカ比較文学会の会員は、大多数が英語圏白人から成っており、欧米文学・理論研究に主眼が置かれている。スペイン語圏も少数派であり、インド人、黒人、アジア系はほとんど皆無なことが、きわめて奇異に映った。北米学会に所属する有色人種たちは、むしろＡＡＳ（アジア研究学会）他を学術活動の拠点としている。またメキシコでの開催には、現今の出入国管理強化の体制下で、green card を持たない北米在住非米国籍研究者がかえって不利益を蒙るとの理由で、国際比較文学会会長（当時）から難色が示されていた事実も知らされた。

(14) David Damrosch, *What Is World Literature?* Princeton, NJ: Princeton University Press, 2003, pp. 282–303. 本書については、川島健による書評（『比較文学研究』第88号、二〇〇六年十月、一五八―六二頁）がある。

(15) ここに、Ｅ・Ｗ・サイードが再引用したことで人口に膾炙した、サン・ヴィクトールのフーゴーの警句の余韻を見て取ることも可能だろう。英語圏での議論には、この程度の言葉は暗記しておいたほうが、何かと便利なので、ここでは英訳を引いておこう。"The man who finds his homeland sweet is still a tender beginner; he to whom every soil is as his native one is already strong; but he is perfect to whom the entire world is as a foreign land." E. W. Said, *Orientalism*, Vintage edition, 1978, p. 259. 問題なのは、まず、フーゴーの悟りも、実際には普遍を志向するカトリック教会秩序の保護下にあったこと。二つめに、世界は、決してこうした少数の「強者」によって出来上がってはおらず、教育者は大多数の「弱者」の処遇にこそ配慮を払う必要のあること。三つめに、この「超人」志向の移民意識が、「理論」偏重の「精神的離陸＝隔離」の温床となり、一九八〇年代以降の北米人文学における、少数派＝強者意識を正当化する文化的土壌を培ったこと。

(16) 平川祐弘「ウェイリーによる『源氏物語』の評価と日本文化の評価」日本比較文学会創設六十周年記念第七十回全国大会発表。なお、平川基調講演案に代えて本シンポジウムが立案されたとする説をたまたま耳にしたが、筆者の出席する理事会席上でかかる議論がなされた事実はない。また、筆者がシンポジウム立ち上げの実務依頼を受けたのは、理事会の後日のことである。

(17) *Modanizumu, Modernist Fiction from Japan, 1913–1938*, compiled and edited by William J. Tyler, Honolulu: University of Hawai'i Press, 2008.

(18) 国際研究集会「石川淳と戦後日本」（国際日本文化研究センター、第三十四回国際研究集会、鈴木貞美主催、二〇〇八年六月二十七―三十日開催）では、複数の外国人研究者が、石川淳作品にＶ・ターナー、パフ

チンあるいは山口昌男の『文化と両義性』のトリックスター理論を適用しようとした。だがそもそも『荒魂』（一九六四年）がひとつの下敷きにしているスサノオ、オオナムチあるいはサタの神に纏わる伝説を収めた『出雲風土記』こそが、山口の論文 "La structure mythico-théâtrale de la royauté japonaise" *Esprit*, fév. 1973, pp. 315–43.（日本特集号）の主要な分析対象であることを知れば、石川が暗に準拠した神話から山口理論が彫琢された、という経緯も見えてくる。鈴木貞美の指摘によれば、大江健三郎の神話的形象は、山口の影響下、石川淳の先行作にも目配りをして成立している。その大江がノーベル賞を受賞する環境が成立して初めて、石川淳の文学構想の一斑も〈世界文学〉の枠組みのなかで、その真価を評価される条件が整ったといえようか。なお仏文学翻訳者であるとともに、戦時中の発禁処分の経験を江戸の戯作に投影し、大田南畝に傾倒する一方、中国文藝から、池大雅・與謝蕪村に始まる日本南画にも深い造詣を誇る石川淳は、従来の西欧基準の〈世界文学〉を大きく超える逸物的な存在だった。

(19) 稲賀繁美「翻訳の魂魄――石川淳『荒魂』英訳のための備忘録的メモランダ」『図書新聞』二八六六号、『思考の隅景』連載第九十八回、二〇〇八年四月十九日付。なお本文で言及した映画で「日本美学」の典型を演じてみせた松田優作は、「在日」の家系に属する出自を有する。

(20) この逸話を出発点とした反省としては、下村寅太郎「日本の近代化における哲学について」『哲学思想』現代日本思想史大系、第二十四巻、一九六五年（『下村寅太郎著作集』みすず書房、一九九〇年、第十二巻所収）、藤田正勝／ブレッド・デーヴィス編『世界のなかの日本哲学』昭和堂、二〇〇五年、二〇―三〇頁に再掲。レーヴィット『東洋と西洋』（佐藤明雄訳、未來社、一九九〇年）所収の論文に類似した逸話が見えるが、下村の指摘する「梯子」の比喩はここには見えない。またこの下村の見解への私見は、Shigemi Inaga, "Philosophia, Ethica, and Aesthetica in the Far-Eastern Cultural Sphere: Receptions of Western Ideas and Reactions to the Western Cultural Hegemony," in *Culture of Knowledge: International Conference*, Transcultura, Pondicherry, 2005 (forthcoming).

(21) Naoki Sakai, *Translation and Subjectivity*, Minneapolis and London: University of Minnesota Press, 1999. およびそれと続く仕事。ここでは二〇〇八年四月八日UCLAにおける酒井の英語講演に対する筆者の即席のコメントに拠る。詳しくは、拙稿「地理学的想像力から地学的想像力へ――酒井直樹氏の講演「翻訳と地図作成術的想像力」を聴いて」『図書新聞』二八七九号（二〇〇八年七月二十六日）参照。また、酒井の日本での代弁者たちに抗しつつ、こうした言語へゲモニーの相克に真っ向から切り込んだ鮮烈な論考として、済州島出身者の家系に生を受けた李建志の仕事がある。『朝鮮近代文学とナショナリズム』作品社、二〇〇七年。『日韓ナショナリズムの解体』筑摩書房、二〇〇八年。なお当然ながら、これらの仕事は現時点で、韓国のいくつかの学界関係者からは拒絶に近い反応を引き起こしていることも付記したい。

(22) いうまでもなく、問題は全球市場の猛威による地場産品の壊滅状況にある。この市場メカニズムに切り込んだ洞察を加えている著作として、白川昌生『美術、市場、地域通貨をめぐって』水声社、二〇〇一年。『美術・マイノリティ・実践』水声社、二〇〇五年。『美術・記憶・生』水声社、二〇〇七年。

(23) この欧州文明化の波及という優位が揺らいだ徴候として、一方にはアレホ・カルペンティエールの『失われた足跡』（一九五三年刊行）、他方にはクロード・レヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』（一九三五年からの現地調査に基づき、一九五五年に刊行）を指摘できよう。

(24) 西成彦『移動文学論（Ⅱ）エクストラテリトリアル』作品社、二〇〇八年参照。

(25) Cf. Shigemi Inaga, "Beneath the Global Theoretical Hegemony: Local Resistances against the Globalizing Will to Power," in James Elkins and Zhiva Valiavicharscka (eds.), *The Globalization of Art*, Chicago: Chicago Stone Summer Theory Institute, School of the Art Institute of Chicago, 2007 (forthcoming).

(26) Cf. Gunilla Lindberg-Wada et al. (eds.), *Literary History: Towards a Global Perspective*, 4 vols., Berlin and New York: Walter de Gruyter Inc., 2006. Gunilla Lindberg-Wada (ed.), *Studying Transcultural Literary History*, Berlin and New York: Walter de Gryter, 2006. 成型と妥協形成の政治的力学については、Pierre Bourdieu, *Ce que parler veut dire*, Paris: Fayard, 1982（稲賀繁美訳『話すということ』藤原書店、一九九三年）; *Langage et pouvoir symbolique*, Paris: Fayard, 2001.

(27) Cf. Shigemi Inaga, "Impossible avant-garde au Japon," in *Connaissance et réciprocité*, ed. by Alain le Pichon, Preface by Umberto Eco, Louvain-La-Neuve: CHICO éditeur, 1988, pp. 198–202; translated into English by Margaret J. Flynn, "The Impossible Avant-Garde in Japan," *The Year Book of Comparative and General Literature*, No. 41, 1993, pp. 67–75.

(28) 多和田葉子は、川によって隔てられた両方の岸が、互いに結びつこうとして近寄り、接合が完成してしまうと、その瞬間、ふたつの岸が消滅するだけでなく、川という、両岸を隔てるがゆえに両岸の人々を対岸に引き付けていた源も喪失する、という逆説を説いている。これは異文化

の相互理解の「達成」を称揚する俗説が見落としてきた迂闊な盲点を指し示す、卓抜な譬え話といえよう。

(29) 太田雄三『英語と日本人』TBSブリタニカ、一九八一年、講談社学術文庫、一九九五年。

(30) 橋本順光「義経＝ジンギスカン説と黄禍論」『女は変身する』ナイトメア叢書、青弓社、二〇〇八年、一七八―一八四頁。

(31) 亀井俊介『ヨネ・ノグチの英文著作』ヨネ・ノグチ英文著作集、別冊解説、Edition Synapse, 二〇〇七年。また堀まどかによる一連の論考を参照。「象徴主義移入期の芭蕉評価――野口米次郎のもたらしたもの」『総研大ジャーナル』第二号、二〇〇六年三月、五九―九一頁。「野口米次郎の英国講演における日本詩歌論――芭蕉、俳句、象徴主義」『日本研究』第三十二集、二〇〇六年三月、三九九―八一頁。「野口米次郎のラジオと刊行書籍に見る「戦争詩」――『宣戦布告』と『八紘頌一百集』を中心に」『日本研究』第三十八集、二〇〇八年十二月刊行予定。

(32) 稲賀繁美「幽玄、ワビ、サビ――「日本的」なるものの創生とその背景」『あいだ』第百十一号、二〇〇五年三月、二七―三〇頁。また鈴木貞美・岩井茂樹編『わび・さび・幽玄――「日本的なるもの」への道程』水声社、二〇〇六年。

(33) Sano Mayuko, "International Recognition and the Future of Traditional Culture: A View from and around UNESCO," in Shigemi Inaga (ed.), *Traditional Japanese Arts and Crafts in the 21st Century*, Kyoto: IRCJS, pp. 365-388. 佐野真由子「伝統文化の国際的認知をめぐる問題――ユネスコ無形文化遺産保護条約と十九世紀万国博覧会の比較考察から」稲賀編『伝統工藝再考――京のうちそと』思文閣出版、二〇〇七年、一〇七頁以下。

(34) 谷崎潤一郎の作品の最初の英訳では、文中に登場するメアリー・ピックフォードらのハリウッド映画俳優の名前が検閲されて抹消された、との報告を耳にしたことがある。『痴人の愛』『陰翳礼讃』『瘋癲老人日記』などの英訳により事実確認を試みたが、遺憾なことに判然としない。識者のご教示に期待する。この「検閲」が事実だとすれば、これも「純粋の日本美学」という受け手の側の期待に添って、翻訳編集に「調整」が加えられた事例といえようか。作品受容側の市場が要求する紋切り型の妥協形成への抵抗を、パリの劇場にアルゼンチンのタンゴを下敷きにした作品を売り込もうとする事業が失敗におわる顛末として、劇中劇のかたちで見事に形象化した映画に『タンゴ・ガルデラの亡命』(日本語版字幕＝野谷文昭)がある。そこではパリの都会的洗練に憧れる南米の側の文化的矜持と、パリで要求されるラテン・アメリカらしさという野蛮性と頽廃という紋切り型とのあいだで、最適の妥協点を探る試みが、幾分戯画化されたパリの批評家たちから拒絶される様子が描かれていた。だが皮肉にも、この作品に対するパリでの批評の大半は、作品が劇中劇の趣向で仕込んだ、パリ批評界に対するこの辛辣な批判を、見事に見落とし、あるいは意図的に無視していた。

(35) Edward Seidenstecker, *Genji Days*, Tokyo and New York: Kodansha International /Harper and Row, 1976, p. 188. 小田桐弘子「英訳『源氏物語』つれづれ」『大手前大学論集』第八号、二〇〇八年、六六頁。

(36) ただし、こうした見解は、特定の訳者への個人的攻撃となりがちなため、会話の話題とはなっても活字で報告されることは少ない。夏目漱石の『こころ』の英訳に関しては、Sukehiro Hirakawa, *Japan's Love-Hate Relationship with the West*, London: Global Oreintal, 2005, pp. 440-41 参照。Kinya Tsuruta (鶴田欣也)「谷崎潤一郎の美の世界――西洋巡礼と日本回帰」国際日本文化研究センター学術講演、一九九八年三月十日(未刊行)。また川端康成における同様の例は、鶴田欣也・平川祐弘『川端康成『山の音』研究』明治書院、一九八五年でも検討されている。

(37) これを補う卓抜な視点として、四方田犬彦『翻訳と雑神』『日本のマラーノ文学』ともに人文書院、二〇〇七年。なお金素雲はいわゆる日本語「親日文学」に、韓日文化の狭間と発生する不可避なる毒を中和するための「種痘」、一身を腫れ物へと委ねた犠牲者を認めていた。金素雲『天の涯に生くるとも』崔博光・上垣外憲一訳、新潮社、一九八三年。林容澤『金素雲『朝鮮詩集』の世界』中公新書、二〇〇〇年、二二七頁に引用あり。

(38) 稲賀繁美「トポロジー空間の中の二十一世紀世界美術(三)」『あいだ』百四十七号、二〇〇八年四月、一二六―三〇頁。「事情を知る者には了解できるが、それ以外の者にはまるで反対のメッセージとして受け取られてしまうであろうメッセージをこっそりとテクストのなかに忍びこませるというのは、どの時代にあってもメディアと権力から疎外され、はからずも周縁地帯へと追いやられてしまった者たちが最後に訴える修辞的手段であった」四方田『日本のマラーノ文学』八頁、註38。徐冰がこの状況を逆手にとって世界制覇をなしとげ、中華文明圏においても破格の成功を収めつつあることは明らかだ。

(39) Shigemi Inaga, "Standing on the Border," *Narratives of Migration and Diaspora in the Age of Global Capitalism*, Kyung Hee University, Global Campus Central Library, June 13, 2008, pp. 27-32.

(40) 一般向きの記述としては、中西進「紫式部と白楽天」『ひとと歴』第八巻第一号、二〇〇八年一月、二五―二六頁。

(41) Murasaki Shikibu, *The Tale of Genji*, translated by Royall Tyler, Penguin Classics, 2003, p. 687. 紫式部が白楽天の詩を換骨奪胎したのに類比できる操作を、アーサー・ウェイリーも『源氏物語』の英訳でなしている。「空蟬」の原典では、脱ぎ捨てられた小袿に源氏が女の残り香を偲ぶ趣向だったが、女性の寝間着をペチコートと訳しては当時の英国での道徳観には抵触する。そう考えてか、ウェイリーはこれを女物のスカーフという穏当な意匠にすり替えて翻訳した。これも受容側の文化妥当性に照らして翻訳に手心が加えられた一例だが、その経緯と辻褄あわせの顚末、さらにはそれがウェイリー訳の『詩経』に収められた「無衣」の斬新なる解釈にまで波及した軌跡に関しては、以下の犀利な論文を参照。平川祐弘「きぬぎぬの別れ――奇人アーサー・ウェイリーが開いた『源氏物語』の魔法の世界」『文學界』二〇〇四年八月号、一九〇―二五六頁。翻訳の営みを通じて織り成される、かかる妥協形成の連鎖の系譜に、原典の潜在的可能性が芽吹き、〈世界文学〉の生態が浮かび上がる。

第七回島田謹二記念学藝賞について

第七回島田謹二記念学藝賞銓衡会議は、平成十九年十二月二十七日（木）、銀座「中嶋」を会場に開かれた。出席したのは、芳賀徹、亀井俊介、小堀桂一郎、川本皓嗣の各銓衡委員、島田先生御長女齊藤信子さん、そして私であった。席上、十点ほどの書名が挙げられ、うち二点については候補作として議論されたが、この日は決着をみず、後日改めて郵便等により各銓衡委員の評価を川本委員がとりまとめることになった。

明けて平成二十年二月末になり、候補作について各銓衡委員の評価が一致しないことが確認されたので、今回の島田謹二記念学藝賞は「該当作なし」とすることが決定された。

銓衡経過及び結果については、平成二十年四月六日（日）午後一時より上野精養軒で開かれた「島田謹二先生を偲ぶ会」で報告された。

（菅原克也）

Is "World Literature" Possible? : Comparative Literature in the Context of Globalization

INAGA Shigemi

The paper tries to offer a critical overview of the current problem concerning the notion of "World Literature." In the last ten years the question has been raised: What does globalization mean in the study of comparative literature? Previously, the main concern of Japanese comparatists in literary studies consisted in analysing the ways Chinese pre-modern and Western modern literatures were transmitted in Japan. The elucidation of foreign sources and of their influences on Japanese literature was predominant. Post-colonial studies since the late 80s of the twentieth century introduced a drastic shift. It focused on non-European literary creation and thereby questioned the status-quo of the Western canon. Non-Western writers have come to the fore and began to represent the world literary scene. Some top-ranking Asian and African novelists, poets, and dramatists have been recognized as major artists on a global scale, while others have been relegated to local and minor markets. The gap between those who enjoy the privilege of being translated into major languages and those who are excluded from it has become crucial. The hegemony of major languages is threatening the minor languages with extinction.

The idea of "distant reading" has been recommended by some sectors

of North-American comparative literature as a clever way of overcoming the limitation of the studies in national literatures. While it opens up a theoretical perspective beyond the level of empirical data, it also encourages students to lose the philological grasp of the vernacular and original source languages in which the pieces of works are written. It is as if the full command of academic English alone were enough to write satisfying theoretical papers. This tendency contributed to analyzing literary works mainly through English translations. Keeping its critical distance from direct text reading, most of the theory-oriented scholars deliberately overlook what kind of sacrifice the English translation is requiring of the original and what kind of symbolic violence it is exercising on subordinated languages. Despite its pretension of studying the compromise between a western formal influence and local materials, distant reading fails to locate the place where compromise takes place. While aiming at dissecting the triangular interplay of foreign plot, local characters and local narrative voice, distant reading deprives itself of the very access to the arena where cracks and faults emerge in the global scale of the world literary creations.

The present paper proposes, instead, to reconsider the role of translation as irreplaceable indicators of the cracks. Fault-lines run in the re-moulding of local products into a suitable form of commodity goods for the global market. The oscillation between local interests and universal ambition may be observed as a form of electric discharge like a thunderstorm in meteorological terms. The compression of nationalism and trans- or anti- nationalisms may be described as chemical reactions. Even a geological imagination may be required to account for placations and dislocations which occur in the earthly clash of civilizations. In all these, the translation offers a vivid tomography. The microscopic comparison between the original and the translated texts may well be criticized as a variant of close reading which depends on an extremely small canon. And yet, it is there that the structure of the global earthquake which the humanities have experienced is meticulously recorded in infinitesimal detail (in the guise of "Nachleben"). It is not the texts in target language (English translations) that stand for world literature; it is rather the cleavage and gap between the original source language and the translated texts that witness to the distance that world literature has to compass and strive to bridge.

There is always a certain distance which separates the local practices

from so-called global recognition. And the distance may be proportional of the effort of migration that the translation work has to accomplish. The migration inevitably gains and loses. The translation often has to sacrifice the original to a critical degree. Highly praised translation may be realized at the price of destroying the original almost beyond recognition. And yet the distortion also reveals the potential in the original. It is in this chain effect of interminable compromise and metamorphosis, or even through the metempsychosis (by definition, out of recognition) that "World Literature" appears as a phoenix. Indeed a phoenix is "always ready to take flight in a new direction" (Franco Moletti, "On the Novel," in *The Novel*, 2006). Instead of 'distan*t* reading' an attempt of 'distan*ce* reading' between the original and the translation is requested so as to measure the reach of "World Literature."

Editorial Board

INOUE Ken
SUGAWARA Katsuya
ELLIS Toshiko
IMAHASHI Eiko
IIJIMA Yūji
John BOCCELLARI
SUGITA Hideaki
KOTAJIMA Yōsuke
TOKUMORI Makoto

Tōdai Hikaku-Bungaku-kai
Graduate School of Arts and Sciences
University of Tokyo
3-8-1, Komaba, Meguro-ku,
Tokyo, 153-8902, Japan